

三瓶山におけるカラアカハラの確認記録

星野由美子*・市橋直規**

Record of the Grey-backed Thrush *Turdus hortulorum* at Mt. Sanbe

Yumiko Hoshino and Naoki Ichihashi

1. はじめに

カラアカハラ *Turdus hortulorum* は、ロシア東部から中国北東部で繁殖し、日本では春と秋の渡りの時期におもに日本海側を少数が通過する旅鳥（樋口ほか,1997）とされている。島根県松江市美保関における春の標識調査においても1996年から2016年まで毎年のように捕獲されており、同地での放鳥数は41羽を超えている（市橋ほか,2018）。国内における繁殖期の確認は、2003年6月に石川県金沢市において、本種のさえずり、つがい形成および造巣などの繁殖初期行動が石塚ら（2004）によって観察されたほか、長崎県対馬で2013年と2014年に本種の巣立ちヒナ（未同定）らしき個体の観察例（杉原,2014）がある。また、広島県北広島町で2017年に完成した巣と卵が小海途ら（2018）によって確認されているが繁殖を示唆する報告は多くない。

今回は2016年から4カ年にわたって三瓶山周辺で実施した標識調査において繁殖期に確認されたカラアカハラについて報告する。

2. 調査地および調査方法

観察された場所については、繁殖保護の観点から詳細を紹介しないが、落葉広葉樹とスギ、ヒノキなどの針葉樹がモザイク状に生育し、林床はササ類などはなくクロモジなどの低木と草本が生育する環境である。

この森林内及び林縁部にかすみ網（36メッシュ）を10枚程度設置して各種鳥類の生息・繁殖状況調査を

実施した（図1）。捕獲には、鳥類の安全な取り扱いに熟練した鳥類標識調査員があたった。



図1 調査地の状況

3. 結果および考察

この調査で確認されたカラアカハラは表1のとおりである。

2016年は8月4日にオス1羽が確認された（図2）。この個体は、風切羽等が換羽中であったが、中雨覆と尾羽などの各部位に幼羽および第1回冬羽が確認されたため第1回夏羽から第2回冬羽への移行中と考えられた。そのため、この個体が同地で繁殖したのか、越冬地への移動中なのかは判別できなかった。

2017年は前年と同様の調査地で6月下旬に調査を実施したが、カラアカハラは捕獲されなかった。ただし

* 島根県立三瓶自然館, 〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Liaison Conference of Green and Water, Ohda, Shimane 694-0064, Japan

** 日本鳥類標識協会, 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115 （公財）山階鳥類研究所鳥類標識センター内

Japan Bird Banding Association, Bird Migration Research Center, 115 Konoyama, Abiko, Chiba, 270-1145, Japan

表1 カラアカハラ 標識調査による確認の記録

年	月日	性	齢(判定基準)	抱卵斑(指標)	その他
2016	8月4日	オス	第1回夏羽(羽衣:中雨覆・尾羽)	-	第2回冬羽へ換羽中
2017	(捕獲無し)				
2018	6月25日	オス	第1回夏羽(羽衣:大雨覆ほか)	なし(1)	
	6月26日	メス	第1回夏羽(羽衣:大雨覆ほか)	顕著(5)	
2019	6月24日	オス	成鳥(羽衣)	なし(1)	

調査中に調査地から150mほど離れた地点でさえずりが確認され、付近に生息していることは示唆された。

2018年はオス1羽とメス1羽がそれぞれ確認された(図3,4)。6月25日に確認されたオス1羽(図3)は、大雨覆に幼羽が残っていたことから第1回夏羽と考えられた。抱卵斑は確認されなかった。6月26日に確認されたメス1羽(図4)も、大雨覆に幼羽が残っていたことから第1回夏羽と考えられた。また抱卵斑は顕著であり(図5)、繁殖している可能性が示唆された。

2019年はオス1羽が確認された(図6)。この個体は6月24日に確認されたが幼羽などはなく、成鳥である



図4 2018年に確認されたカラアカハラ メス第1回夏羽



図2 2016年に確認されたカラアカハラ オス第1回夏羽から第2回冬羽へ移行中

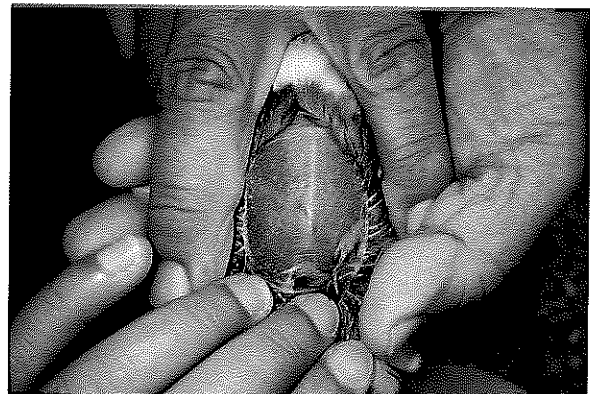


図5 2018年に確認されたカラアカハラ メスの顕著な抱卵斑



図3 2018年に確認されたカラアカハラ オス第1回夏羽



図6 2019年に確認されたカラアカハラ オス

と考えられた。抱卵斑は確認されなかった。

標識調査による繁殖の確実性については、日本鳥類標識協会より「バンディングによる繁殖指標」(2016)が、次のように示されている。

- 指標 1. 鳥類標識調査において腹中に卵を触れる雌成鳥を捕獲。
- 指標 2. 鳥類標識調査において顕著な抱卵斑を持つ雌成鳥(場合によっては雄成鳥)を、繁殖期間中の異なった時期に複数回捕獲、もしくは顕著な抱卵斑を持つ個体を複数捕獲。
- 指標 3. 鳥類標識調査において幼綿羽が残る、もしくは全身が幼羽の状態で、第一回冬羽への換羽がまだ始まっていない個体を捕獲。

これによると、指標 2 にある顕著な抱卵斑を持つメス成鳥を捕獲したものの、捕獲は 1 回で 1 羽のみであったため、指標 2 には該当せず繁殖が確実とはされない。なお指標 1 および指標 3 の個体は捕獲されていない。しかし、同地では 4 年間継続して繁殖期に同種が確認されているため継続した繁殖の可能性を示唆していると思われる。

謝 辞

茂田良光・米田重玄両氏にはカラアカハラの同定に際して種々のご教示をいただいた。標識調査にあたっては環境省鳥類標識調査員の勝野史雄・古園由香・鈴木仁・鳴海末信 各氏にご助力いただいた。また調査の際には岩谷由美子・中田朋子両氏にご支援をいただいた。調査をご快諾いただいた土地所有者の児玉賢次氏にも厚くお礼申し上げる。

その他、本調査にあたってご協力いただいた多くのみなさまに、この場を借りてお礼申し上げます。

引用文献

- 樋口広芳・山岸哲・森岡広之(1997)カラアカハラ。日本動物大百科 4, 鳥類 II, 平凡社, 東京
- 市橋直規・米田重玄・山崎智子(2018)美保関における渡り鳥長期調査報告。ホシザキグリーン財団研究報告, 21: 273-280
- 石塚徹・手井修三(2004)カラアカハラの初期繁殖行動。Strix, 22: 201-206
- 小海途銀次郎・和田貞次・奥野一男(2018)日本におけるカラアカハラの完成した巣と卵の初確認記録。Strix, 34: 105-109
- 日本標識協会評議員会(2016)バンディングによる繁殖指標について。バンダーニュース, 59: 17-19.
- 杉原敏(2014)対馬産鳥類記録。対馬やちょうの会会報, 10: 15